

第3回日本医師会・日本獣医師会による連携シンポジウム 「越境性感染症の現状と課題」開催される

平成27年11月6日（金）、日本医師会館大講堂（東京都文京区）において、第3回日本医師会・日本獣医師会による連携シンポジウム「越境性感染症の現状と課題」が、日本医師会と日本獣医師会の共同主催、厚生労働省、農林水産省、環境省、文部科学省、日本学術会議の後援のもと、481名の参加者を得て盛大に開催された。



まず、進行を務める日本獣医師会の酒井副会長から、「公益社団法人日本医師会と公益社団法人日本獣医師会は、平成25年11月20日に学術協定を提携いたしました。これに基づき両会に所属する医師と獣医師の研鑽の場として、また多くの市民に学術情報を

提供する場として、第3回シンポジウムを企画しました。開催にご支援とご協力をいただいた、多くの関係者に感謝申し上げます」と述べられシンポジウムは開会した。

続いて、主催者あいさつが次のとおり述べられた。

【公益社団法人日本医師会 小森 貴常任理事あいさつ】



本来、会長の横倉がごあいさつするところ、公務のため出席がかなわなくなりましたので、私が代読申し上げます。

日本医師会を代表してごあいさつ申し上げます。

皆さま方におかれましては、日ごろより感染症予防や家畜診療、食の安全確保等、多岐にわたり多大なるご尽力をいただいております。衷心より敬意と感謝を表する次第です。

本年のノーベル医学・生理学賞に微生物が作る化合物を発見し、医学研究並びに医療の進展に大きく貢献したことから、北里大学特別榮譽教授の大村 智先生が受賞されました。

大村先生の研究をもとに開発された「イベルメクチン」により、オンコセルカ症などから年間3億人が失明の危機から救われています。またこの薬は、犬のフィラリアや家畜の寄生虫の駆除など、人だけでなく、動物の感染症予防にも広く使われており、その恩恵は計り知れません。

大村先生のノーベル賞受賞は日本人として大変誇らし

く思いますとともに、今回の受賞の背景には感染症対策への世界的な関心の高まりがあるとも考えております。

さて、世界医師会と世界獣医学協会は、動物由来感染症対策、食の安全の向上等のために協力関係を構築するための覚書を2012年10月に締結し、わが国においても、獣医師と医師との連携並びに協力体制を強固なものとし、安全で安心な社会の構築に向け、2013年11月20日に日本獣医師会と日本医師会は、学術協力の推進のための協定書を締結いたしました。

本年5月には、世界獣医学協会・世界医師会共催「One Healthに関する国際会議」がスペインのマドリッドにおいて開催され、22日には、「セッション One Health のその他の側面」で「自然災害のマネジメント、備えと医師・獣医師 One Health の連携」をテーマに、日本獣医師会 藏内会長とともに講演を行ったところで

す。その場におきましても、医師と獣医師の協力の取り組みとして、動物由来感染症対策や食の安全の向上等のため、日本医師会と日本獣医師会との間で学術協力の推進のための協定書を締結したこと等を紹介し、「災害への備えのためにも、今後ますます医師と獣医師とが One Health の理念を共有し、連携を強固なものにしていかなければならない」とあらためて表明したところで

す。本連携シンポジウムは、両者の密接な協力関係のもと、ワンワールド・ワンヘルス社会の構築に向けた取り組みの第一歩として、昨年10月に人と動物の共通感染症である狂犬病をテーマに第1回を開催いたしました。その後、本年2月に岡山県で開催された日本獣医師会獣医学術学会年次大会の中で第2回の連携シンポジウムを開催し、今回が3回目となります。

昨今の西アフリカではエボラ出血熱や韓国に MERS、日本ではデング熱等の感染症が流行し、また、グローバル化が進む中、人間や物の世界的な移動が増え、さらには温暖化等の気候変動により、感染症の宿主となる動物の生息地が気候の適した場所に移動するなど、疾病特に感染症の世界規模での拡散が懸念されております。

このような状況に鑑み、今回、第3回連携シンポジウムは越境性感染症をテーマに開催する運びとなりました。

これまでも医師と獣医師は、それぞれの立場からさま

さまざまな取り組みをしてきましたが、医師と獣医師とが共に知を結集することにより、さらなる感染症対策の推進、ひいては医学、獣医学の進歩につながるものと考えております。

本シンポジウムにご参加の皆さま方にとり、実りあるものとなりますことを祈念いたしまして、あいさつとさせていただきます。

平成27年11月6日 日本医師会会長 横倉義武、代読でございます。

本日はどうぞよろしく願いいたします。

【公益社団法人日本獣医師会 藏内勇夫会長あいさつ】



第3回の連携シンポジウムに早朝から多くの皆さまに参加いただき盛大に開催されますことを心から御礼申し上げます。

開催に当たり、日本医師会の大講堂を使用させていただくとともに、日本医師会の皆さまには大変ご尽力いただきましたことをあら

ためて厚くお礼申し上げる次第です。

小森先生のお話にもありましたが、本年5月、世界医師会と世界獣医学協会は、人と動物の健康と環境の保全に関する関係者の連携と情報共有を図るため、第1回のOne Health国際会議をスペインのマドリードにおいて開催しました。

本会議の中では、「自然災害のマネジメント、備えと医師・獣医師の連携」というセッションが開催され、横倉会長が「2011年大震災と福島原発事故、経験と復興に向けての医師と獣医師の連携」について、次いで、私が「東日本大震災からの復興と期待、獣医師の役割とその展望」についての講演を行いました。私の九州弁で多くの人々の関心を引き付けまして、横倉会長の流暢な英語で高い評価を受けました。

そのため、今大会の成功を受け、世界医師会と世界獣医学協会から日本医師会及び日本獣医師会に対し、第2回大会の日本開催を要請されており、現在、日本医師会との間で開催に向け調整を行っているところです。

一方、日本医師会と日本獣医師会が学術協力の推進に関する協定を締結してから、地方の医師会と獣医師会においても学術連携が進められ、現在26の地域において同様の協定が結ばれております。私は、この連携が47都道府県の全地域で網羅され、人と動物の共通感染症をはじめとするさまざまな課題に取り組む、全国組織とし

て構築したいと考えています。

このたびノーベル賞を受賞された大村 智先生におかれては、5年前、宮崎県で開催しました本会の獣医学術学会年次大会でご講演いただいたところであり、人と動物の双方にとって大変大きな業績が認められたものと大変うれしく思っております。

今回、第3回連携シンポジウムでは、「越境性感染症の現状と課題」をテーマとさせていただきましたが、国民にとって大きな関心事となっております。

本シンポジウムにより、両会所属の会員の先生方をはじめ、ご出席の皆さまが学術情報を共有し、国民にとって安心で安全な社会につながることを期待します。

最後に会場にお越しいただいた両会所属の先生方をはじめ、日本医師会の関係者の皆さま方、ご多忙にも関わらず講師並びに座長をお引き受けいただいた森川先生と丸山先生に、心から敬意と感謝申し上げる次第です。

これからも皆さま方と共に安心できる社会を構築できるよう日本獣医師会も努力を重ねてまいりますので、今後とも、よろしくお願い申し上げます。

【講演】

講演に先立ち、本シンポジウム座長の国立感染症研究所の森川 茂獣医科学部長、日本大学の丸山総一教授の紹介が行われた後、講演が進められた。

はじめに、基調講演として日本医師会の小森 貴常任理事から「国際的に脅威となる感染症対策について」として、新興・再興感染症は、国際的な連携のもとに包括的な戦略が必要である旨の内容の講演が行われた。

続いて、国立感染症研究所第三部の松山州徳第四室長から「中東呼吸器症候群（MERS）の現状と対策」として、韓国の感染拡大事例、日本への侵入と検査体制の在り方等についての講演が行われた。

次に、山口大学共同獣医学部の前田 健教授から、「獣医学領域からのSFTS（重症熱性血小板減少症候群）の解明」として、国内での発生動向と獣医学領域からの解明等についての講演が行われた。

最後に国立感染症研究所の西條政幸ウイルス第一部長から、「西アフリカにおけるエボラ出血熱と日本におけるSFTSの流行：求められる対策」として、西アフリカにおけるエボラ出血熱と西日本におけるSFTSの流行の背景を比較して解説がなされた。

それぞれの講演後には、多数の参加者から積極的に質疑があり、本シンポジウムは盛会のうちに終了した。



座長. 右より森川 茂 国立感染症研究所獣医学部長,
丸山総一 日本大学教授



小森 貴 日本医師会常
任理事



松山州徳 国立感染症研
究所第三部第四室長



前田 健 山口大学共同
獣医学部教授



西條政幸 国立感染症研
究所ウイルス第一部長